

# 『小袖貝のゆかり』について

——『太平記』尊良親王配流譚考——

谷 垣 伊 太 雄

一

翻 刻

『太平記』における尊良親王配流譚と後世の諸文献との関わりについては、すでに何度かとりあげた事がある。(注一)

本稿では、それらの作業の一環として、谷山茂博士御所蔵の『小袖貝のゆかり』を翻刻紹介したい(以下「谷山本」と称する)。

谷山本『小袖貝のゆかり』は、縦四十三・二〇〇糎、横二十八・二〇〇糎の大型本。袋綴、十丁(表紙は別、本文は八丁)、一頁八行。紙は厚手の鳥の子紙。表紙は厚手の紙の上に薄絹を覆ったもので、おもて表紙中央に、「小袖貝のゆかり」と書かれた題簽(縦二十二・七糎、横四・八糎)が付されている。(注二)

翻刻にあたっては、変体仮名以外の漢字の字体等について、原文に忠実であるように努めた。

一オ

小袖貝のゆかり

時は元弘のそのむかし世はかりこものことくみ  
たれみたれてかけまくもかしこき時のみかと  
後醍醐天皇には蔭ともたのませ給ふ松のした  
つゆに綾羅の御袖をぬらし給へるおんあり  
さまげにかしこしと申上げんもおろかのこと  
ともなり

一ウ

みかとの第一の皇子尊良親王もおなじうき世の  
あらなみはのかれえさせ給はず土佐の國にうつさ  
れさせ給はんとしければ

せきとむるしからみそなき涙かは

いかななるうきみなるらん

小袖具のゆかり

時を元弘のころに  
 一むすかりこもむすこくみ  
 たふしつゝかかひくもこ  
 一はき時のみか  
 後醍醐天皇にたはる  
 したのむす給ふ松の志た  
 はゆき綾羅の御袖をむす  
 一給ふむちんあま  
 さまよふか  
 一とよんんむらか  
 のこと  
 んなり  
 今よのむすの皇子尊良親王におなり  
 一うけ世の

谷山本「小袖具のゆかり」冒頭ページ

と詠せむせ給ひつゝ御心なすも御身を浮舟に

の地たるや谷ふかく石ふるく老翁かな昔つしておと

と詠せさせ給ひつゝ御心ならずも御身を浮舟に  
 まかせたまひてつひに幡多郡入野郷川口村に  
 つかせ給ひし時蛭川村の領主大平彈正ほのかに  
 承りいそき濱邊にはせ參して親しく拝謁し  
 二才 奉る宮は

土佐の海によをうき草のなかれ来て

よるへなきみをあはれとも見よ

との御詠を下し給はりしはかしこしともかし  
 こき彈正はおつるなみたを袖につゝみて

雲のうへいかてあふかんおよひなき

とさのいりえのもかくれにして

と御答申上とりあへすわかやかたに請し奉る

二ウ 同郷有井川の領主有井三郎左衛門といふものありひ  
 としく御伺ひにいてけるか大平すてに御供申上げ  
 し由を聞きてせんかたはなきさへを空しくひき  
 かへすそれよりこの濱を無王濱とよひまた辰濱とも  
 よへりとそ供奉の人々これを聞きてさてまたの  
 もしき名よこれそ都にかへらせ給はん吉兆ならん  
 といたくよろこひあへりとそ有井の家族ともに坂  
 にて待ち奉りしゆゑこの坂を待王坂といひしをい  
 三オ まは訛りて松尾坂とよへりかくて宮をは蛭川村なる  
 おく山王野山に御供申しはしこの所をかりの御  
 座所とさため給へりしにより後世王野郷と称すこ

の地たるや谷ふかく石ふるく老樹かけ暗うしておと  
 つるゝものとは落葉にむせふ谷川のなかれのみ  
 九重の宮ふかくかしつかれ給ひし金枝玉葉の御身  
 を以てかゝるいふせきふせ屋に御父帝の御うへさては  
 御行末のこともおほしめされてはさすかにかりね  
 三ウ 三ウ 三ウ 三ウ  
 の床の草枕むすひもあへ給はず御物思にしつませ給ふ  
 をりから時鳥一聲そらにおとつれてすきければ  
 なけはきく聞けはみやこの戀しきに

このさとすきよ山ほととぎす

と詠し給ひしより心なき鳥にたに切なる御心やかよ  
 ひけんそれよりこのあたり時鳥のなくねをたてりとそ  
 その後有井大平にかたらひて有井川のおく米原に御  
 殿をしつらひ二度こゝに御迎申上ともに真心をつくし  
 四オ て御守護申上たてまつりぬ有井は特旨を以て二宮  
 の姓を賜りぬこれより有井庄司二宮三郎左衛門豊高と  
 そなのりける

かくて庄司のはからひにて都にしひおはします御息  
 所をむかへいれさせ給へとてわさく御衣したて參  
 らせ隨身秦武文を御迎の使としてひそかに都へ  
 のほせられぬ武文いそき上りつゝ御息所を具し  
 參らせ撰津の國兵庫の浦まで下りつき船をやとひて  
 四ウ のせ參らせ漕きいてんするをりしもあれ筑紫の海賊  
 松浦五郎御息所を奪ひ奉りおのかふねにとのせまぬらせ

海原遠くこきいたしぬ武文おとろきかついかり

小舟に打乗りおひゆけと松浦かふねは順風に矢を  
いることくにゆけは武文いかりの髪さかたて、彼

方のふねをにらみやりやはかそのまゝにまかせおくへきそ

今にも海龍王にうつたへてなんちかふねをくつかへし  
んとふなはたにつつ立ちあかり腹かき切りて海に

五オ 投しぬかくて海賊松浦かふねは淡路の嶋をめぐり鳴戸の  
難所をすきなんとする頃一天俄にかきくもり油を

たゝへしことき青海原さつと吹きすさふ風のおふりに  
波は奔馬とさか巻き立ふねは木葉のまふかことくいま

しもくつかへらんとす船人みなおちおそれやんこと  
なき御方をのせ參らせしゆゑ海神の御崇りにも

やあらんかとてまつ御息所の御上衣をぬかせ參ら  
せ海に投しぬかくてもなみかせやむへくもあらねは

五ウ つひに別の小舟に移し奉る幸に神佛の御加護やあり  
けん波風をさまりて淡路の武嶋につき給ひぬさて松浦

かふねはさかまく波にしつみいりてみな魚腹に<sup>マツ</sup>棄られ  
しそ心よき

さて御息所はゆくりなく淡路の嶋に日をおくり給ひ  
朝には茫々たる海原遠き波路をわけて西南の空に

あこかれ給ひ夕にはあまかやくもしほのけふりに  
御むねをこかし給ふさやけき月を見そなはしても

六オ くもりかちなる孤島の空あはれ御ゆたけき御

面さしもいろあせ給ひよその見るめも御いたはし

さによく、御仔細のありなんと浦人ももこれかれ  
たつね參らずれば世にかしこき尊良親王の御息

所とこそ知られつれか、れは数ならぬ浦の

苦屋におひ立ちしものとても君につくす真心は

一すちにかはりなく誠をこめて御ふねをしつらひ

六ウ たせ給ふ  
參らせ御供申してあこかれ給ふ土佐の國へといて立

米原にまします宮には特に御迎につかはし給ひし  
武文よりの何の消息もなくひそかに御心なやまし給

ひけるに一日高濱の二町はかりなる海中の礁に美しき  
衣かゝれりとて里人のもてきぬるを宮にはいといふ

かしみ給ひもしやとさきにしたて參らせて武文にも  
たせつかはされし衣のかたはしとりいて、たくらへ

御覽せらるゝにまさしく御息所の御上衣の片袖にて有  
ければさてこそ妃にははかなくなりにしかけにいとほ

七オ しきことしてけるよ今はかたみの片袖のうつり香もつら  
めしとくつをれ給ふも御ことわりなりや川風さむく

千鳥なきつる夜半御讀經のこゑ細う御息所また

武文かために冥福をいのり給ひけり後の世までもこの里  
人等はこの磯をきぬかけいと名つけ礁をきぬかけ

いはととなへて昔をしのふかたみとはなしぬさても  
あやしきはこの頃よりくさくさの奇しきあやある貝を

六オ くもりかちなる孤島の空あはれ御ゆたけき御

あやしきはこの頃よりくさくさの奇しきあやめる巨を

七ッ 産せしかはさと人これを小袖貝となん名つけゝる

かくて一日御書見そなはして御餘念もおはしまさぬをり  
から磯の方にあたりて何とはなく人のさわかしき

けはひのしければなに事そと人をつかはして見しめめ給へ  
は御使のものあわたゝしうはせかへりていともうれしけ  
に御息所の御こしにさふらふと申上聞ゆるに宮は一度

しつみしものゝいかて二度かへるものとてひたすらう  
へなひ給はさりしにはやくも御門ちかう御息所のすゝま

八オ せ給ひければあなやとのたまひはせつゝ夢かとはかりお  
とろきたまひ餘りの御うれしさにしはしは御こと

はもなく御まなかひに御涙をふくませ給ひぬるをま  
して御息所のいかてたへさせ給ふへき宮の御ひさにひ  
れふしてよゝとはかりになきいり給ふそおんことわり  
なりける

かくて一度はむら雲におほはれし月もいつしかはれ  
て御代のひかりてりそひ二度花さきとりうたふ  
ハッ ばるにあひぬるそめてたきや

もとり濱の名むなしからて月ころ日ころの御望

かなはせ給ひ御機嫌ことにうるはしう御車を共にして  
都にかへりのほらせ給ひ龍顔うるはしき御ちゝの  
みかとををかせましましゝその御時の御心のうち  
そ申上げんもおろかの事ともにてめてたきともめて  
たき御事になむ

## 二

内容について、他作品と比較すると次頁の表のようになる。ただ  
し、この比較表は『小袖貝のゆかり』を中心としたため、『太平記』  
等における尊良親王と御息所との出会いなどについての記述は、比  
較の枠外という事にした。<sup>(注3)</sup>

資料によって、記述の差は量的にも相当あるが、細部にわたって  
の比較・点検はせずに、ほぼ該当する記述のある場合は、○印をつ  
けた。たとえば、②に於て、『新曲』・『中書王物語』・『太平記』に  
は、御息所の歎きについての描写があり、他の三作品(文献)には  
それがないが、「親王の土佐配流」という点では一致するので○印  
を付した例のように。

一方、⑩では、『新曲』・『中書王物語』・『太平記』は、武嶋の里  
人が御息所に同情しつつも土佐まで送り届ける事はしなかったので  
△印とし、⑪では同じく三作品に小袖貝の産出についての叙述がな  
いため△印とし、⑬では同じく三作品の記述が御息所を武嶋から都  
に迎えての再会という事で△印とした。

『小袖貝のゆかり』一ウの親王の和歌は、『大鏡』の菅原道真の和  
歌「ながれゆくわれはみくづとなりはてぬ君しがらみとなりてとど  
めよ」に基づいて作られたものであるが、他書には見えない。二  
オの親王の和歌は、『土陽洲岳誌』では「土佐ノ海身ハ浮脚ノ流来  
テヨルベノナキヲ哀レトモシレ」となっており、『袖貝の記』<sup>(注4)</sup>では

⑩ 五ウ 六ウ 1 5	⑨ 五ウ 五オ 4 2	⑧ 四オ 五オ 1 4	⑦ 三ウ 四オ 3 7	⑥ 三ウ 三ウ 6 1	⑤ 三オ 三ウ 1 1	④ 二ウ 三オ 1 1	③ 一ウ 一オ 8 8	② ウオ 7 8	① オオ 7 2	小袖貝のゆかり	土陽 淵岳 の記	新曲	中書 王物 語	太平 記卷 十八
御息所の歎きを見て、浦人は御息所を土佐へ送る	松浦の船が進まなくなったため、御息所は小舟に乗せられた。御息所は武嶋に到着し、松浦の船は沈没する	京都に派遣された秦武文は、御息所を御して下国の途中、松浦五郎に御息所を奪われたため自害する	有井、米原に御殿を造り、親王を迎える	親王の詠歌以後、時鳥が啼かなくなつた	大平弾正、王野山に親王の仮御所を造る	有井三郎左衛門も出迎えたが、遅かつた	大平弾正、親王を出迎える	尊良親王の土佐配流	元弘の乱世		○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
△	○	○						○	○	○	○	○	○	○
△	○	○						○	○	○	○	○	○	○
△	○	○						○	○	○	○	○	○	○

⑬ 八オ 八ウ 7 7	⑫ 七ウ 八オ 6 2	⑪ 六ウ 七ウ 1 2	海岸で見付かった小袖により、親王は御息所の死を思つて悲歎にくれる。爾来、小袖貝が取れるようになった	○	○	△	△	△
二人のめでたい帰京	御息所の到着、親王との感激的対面							
				△	△	△	△	△

二句が「身は浮草の」となっている。二オの大平弾正の和歌は、『土陽淵岳誌』では「雲ノ上イカタアヲカン及ナキ土左ノ入江ノモクレニ井ア」、「袖貝の歌」では「哀れともいかであふがん及びなき土佐の入江の藻がくれにゐて」となっている。三ウの親王の和歌は、『土陽淵岳誌』・『袖貝の記』とも『小袖貝のゆかり』と同文である。

ところで、『袖貝の記』では「またあるときはとゞきすを聞給ひて」として、この和歌を載せ、そのあとに「この御哥より今猶かのかり宮のありしさとわたりにほとゞきすのなかぬもあやしかりけり」という文が添えられている。一方、『土陽淵岳誌』では、下巻十二「有井庄司墓」の項に「宮王野ニ御忍マシマス中ノ卯月ノ頃子規ノ声ヲ聞玉ヒテ都ノ事ヲ思召煩セ玉ヒテヤ御詠」として、右の和歌を載せ、「卜詠シ玉フトナンソレヨリ此谷ノホトリニテ郭公鳴ズト申伝へ候也」との一文を添えている。ところが、上巻四十八「土佐山」の項では、この和歌の前に「後鳥羽院隱岐國ニテヨマセ玉フヨシ物ニ見ヘタリ」とあり、和歌のあとに「此歌有井村ニテ読玉フ

⑩五ウ1  
六ウ1御息所の歎きを見て、浦人は  
御息所を土佐へ送る

△

△

△

トナンコレヨリ此里ニ子規鳴カスト云伝」とある。

そこで、隠岐について調べてみると、後鳥羽上皇火葬塚のある島前の海士町(中ノ島)では、この「ナケバキク」という和歌は、後鳥羽院の詠歌として伝承されている。もっとも、この和歌は、『後鳥羽院御百首』・『後鳥羽院御集』やその他勅撰集等にも見えず、「物二見ヘタリ」とある根拠を確認する事はできない。とは言え、遠流の地としての土佐(幡多)と隠岐とに於て、同じ和歌が貴人の配流譚の中に組み込まれている事は、その土地と貴人との関わり方や伝承の型(タイプ)を考える上で、注意すべき事かと思われる。

## 三

御息所の漂着地である淡路島の資料のうち、もっとも成立年代の古い『淡国通記』のみが、沼島に於て御息所の世話をした島人について「沼島の匹夫、これを介抱し奉りし故に、聖運開けし後、匹夫を京華に召し、官名を賜い、橋本修理となしたまう、今に到るまで末孫あり」との記述を有する。<sup>(注5)</sup>

一方、『小袖貝のゆかり』は、親王を守護した有井庄司について「有井は特旨を以て二宮の姓を賜りぬ、これより有井庄司二宮三郎左衛門豊高とそなのりける」と記しており、<sup>(注6)</sup>この二書の記述の符合は、前章で触れた伝承の型について示唆を与えてくれる。

なお、前章の比較表③から⑦までについて、『小袖貝のゆかり』は『土陽淵岳誌』とかなり共通点を持っている。しかし、たとえば

佐山」の項では、この和歌の前に「後鳥羽院隠岐國ニテヨシマセヨシ物二見ヘタリ」とあり、和歌のあとに「此歌有井村ニテ詠玉ヲ

⑤(三オ)に於て、「待王坂」が「訛りて松王坂とよへり」と記されている事は、「此坂ヲ待王坂ト云伝ヘル」とのみ記述する『土陽淵岳誌』に比して、この作品の方が後出である事を示していると言えよう。

又、谷山本『小袖貝のゆかり』は、献上本のような装いさえ持つ優美な本であるが、文体を点検した場合、「家族(二ウ7)」、「金枝玉葉(三オ6)」、「特旨(四オ1)」、「奔馬(五オ4)」、「冥福七オ5」等の名詞、「投し(五オ8)」、「産せ(七ウ1)」等の動詞、「特に(六ウ2)」等の副詞の使用例から考えると、成立年代をさほど溯行させる事はできないのではないか、と思われる。

## 四

ところで、『小袖貝のゆかり』の「写本」として、『國書總目録』は、学習院大学図書館所蔵本(以下「学習院本」と称する)を記載している。学習院本は縦二十四・八糎、横十六・八糎の袋綴本で、本文十三丁(表紙は別)のこの本は枚山四五郎氏より寄贈され、大正十年七月十三日付で大学の所蔵となったものである。

谷山本と比較した場合、漢字と仮名との使用の違いを除けば、本文に関しては大きな差はない。次頁に二本の違いを表示する。

この学習院本では、一オから十三ウ一行目まで本文が書かれており、そのあとに「小袖貝のゆかりの後に記す」として、次のような一文が付記されている。

	谷山本	学習院本
二オ 4	給はりしは	給はりしそ
三オ 2	御供申しはし	御供申しはらく
三ウ 6	時鳥のなくね	時鳥なくね
四ウ 1	漕きいてんする	漕きいてんとする
七ウ 4	けはひのしければ	けはひしければ
七ウ 4	つかはして見しめ	つかはし見しめ
八オ 2	餘りのうれしさに	餘りの御うれしさに
八ウ 7	めてたき御事になむ	めてたき御ことになん

「明治四十三年十一月仲旬後藤通相の君 鐵道院總裁の事務をおひ持たれて 四國地方を巡視し給ひ 數日を経てわか高知縣に着せられ 高知市より順次高岡郡を経て幡多の郡を過ぎましゝとき 彼郡より入野の濱なる名産小袖貝を採りて劉覽に供せしに 通相いたくこれを珍らしみ給ひて 之は都にもたらし歸り 恐きあたりに捧げまつらまほし 是の故よししるしたる文添へてよと杉山縣知事の君に誂らへ給ひしに 恰も縣知事の君の令妹の刀自この事をつはらに書きしるされたる文ありければ尚これを考訂してよきに整へよと 植木事務官よりしてやつかれに言傳へられぬ そもこの貝のゆかりはふるくより我縣に傳ふる所にして中にはいかゞと頷かるゝかとのましらぬにしもあらざれば 殊によく考査して誤りなきを

捧げまつらまほしくて何くれと考へ合せ 縣の先哲今村庸成の袖貝考 鹿持雅澄の小袖貝長篇哥に搜り 原文の事実の或はいかゞと思はるる所は削りもし また物足らはぬ心地のせらるゝ所は添へもして あらましにとりしたゝめ 尚今たひ浄書の命をかゝふれる入交好徳にも言謀りて かくは整へ定めしにそありける 今その顛末を文の終りに書き添へ置くへしとの命により その大略を叙する事かくの如し

明治四十三年十二月

伊藤乘興

右の二本以外にも『小袖貝のゆかり』が存在するのかどうか現在のところ不明であり、学習院本の跋文についても、いくつかの問題が考えられる。たとえば、「今村庸成の袖貝考」とあるが、今村樂(庸成へ虎成)は別称)の著作としては『袖貝の記』があり、これは『土佐国群書類従』巻百三十四・雑四には『袖介記』という名称で収められてはいるものの、『袖貝考』という著述はない。又、「鹿持雅澄の小袖貝長篇哥」というのは、『山齋集』に「贈八多郡入野濱所産袖貝于江戸人歌」との題で収められているものを指すと思われるが、表現について点検してみると、どの程度参考にされたものか疑問である。

その他、原小袖貝のゆかり、とでも言うべきものの存在も考えられるが、本稿は『小袖貝のゆかり』の紹介が主目的であったため、その作品的価値等について早急な結論を出す事は留保せざるをえなかった。

## 注

- 1 「尊良親王配流譚をめぐって—『太平記』の一研究—」(『王朝第九冊』)。「袖貝の記」校異—『太平記』のための基礎的覚書—」(『樟蔭国文学』第十四号)。「『太平記』と『淡路常磐草』」(『大阪樟蔭女子大学論集』第十四号)。「『太平記』と『淡路国名所圖繪』」(『大阪樟蔭女子大学論集』第十五号)。
- 2 十丁は二箇所が紙縫で綴じられている。表紙は右の二箇所とは別に二箇所が布紐で綴じられているが、布紐は後に補われたもので、元の綴じ方は不明である。
- 3 『土陽淵岳誌』は高知県立図書館より刊行されたもの、「袖貝の記」は高知県立図書館所蔵の写本のうち、弘化三年の奥書を有するもの、「新曲」は笹野堅氏編『幸若舞曲集』(第一書房)所収のもの、「中書王物語」は平出鏗二郎氏編『室町時代小説集』(精華書院)所収のもの、「太平記」は日本古典文学大系本を、それぞれ使用した。
- 4 『袖貝の記』では巻末に「附て云ふ」として四首の歌を載せている。つまり、「小袖貝のゆかり」二オの太平彈正の歌のあとに、「又かのやまかけのかり宮にすみ詫させたまふほとにやありけん」という詞書とともに「わかいほはとさのやまかせさゆる夜の軒もる月のかげこほるなり」という親王の歌を載せている。『土陽淵岳誌』は下巻十二項にはこの歌はなく、上巻四十八項に「我庵ハ土佐ノ山風サユル夜ニ軒モル月ノ影コホルナリ」という形で載せている。なお、この歌は、『新葉和歌集』巻十六(雑歌上)に「土佐國にて百首の歌よみ侍りける中に 冬月」との詞書を付して収められている(「軒もる月も」となっている)。
- 5 引用は新見貫次監修(木下敬訓読)『淡国通記』(名著出版)による。なお、碧湛の『淡国通記』は、元禄四年の自序をもっている。
- 6 『土陽淵岳誌』をはじめ、他の土佐の資料には、この記述はない。
- 7 東大史料編纂所所蔵『土佐国群書類従』(高知県史編纂事務所撮影の写真による)には、「袖介記」との題で、「大坂儒士片山忠藏」「近江寛正寺 海量法師」そして「今村庸成」の詩文が続いて載せられている。
- 8 山本修三編『山斎集』(日進印刷・明治四十一年刊)所収のものを次に掲げる。なお『続日本歌学全書 第九編』(博文館・明治三十四年刊)所収のものでは、「裏御室濱産貝贈齋部道足歌并短歌」となっている。
- 「土佐の海の入野の濱に奥津波来よするまにま、玉はしもさはにによれども、且はしもしゞによれども、海山と草木の圖を青土持、畫るか如く其章の見のあやしくなりいでし、この袖貝の故縁を如何は問ふに、里人の語り告ぐらく、懸まくは恐きかもよ、天地の神のあらびと大八洲國內ことぐ、亂れりし、時のさかりに鎌倉の平の子等は、世間の醜の鬼巨くなた

ぶれ、たぶればこりて遠神、吾大王を宍しもの弓矢かくみて、夷離隱岐の國邊に神下しませし時に、天皇の神の御手は大舟に眞槌しぬき、鯨とり海路にいで、遠々し土佐道を指て、百船の泊る入野の濱清み、はて給へれば其處をしもあやかにしこみ里人い、迎へまる來て磯山に、行宮仕へ尊くいませ奉りぬ、しかれども大宮のへに露霜のおきて別れし若草、みめの命を玉櫛懸てしぬば山たづの迎へ早來と、畏くも聞すまに、仕へ人秦の若子はあしびきの山行野行直涉川ゆき亘り、京邊にゆきたらはして、あさぢ原つばらゝに大みこと、傳へ申していそしくも御供つかへて、押照るや難波の三津に、すむやけくきたりしものを、春山のしなひ榮えて、秋山の色なつかしき御面輪を、かきまみまつり遠つ人、松浦たけるがるやなくもたはけむものと、しら浪の濱松か根の下延し心もしらに、荒磯邊に借庵つくとわく子等が蘆刈端に遠津人松浦たけるい、若草のみめのみことを、おふけないかきうたきて、さにぬりの小舟にのりておきさかりこぎいでにしを、阿波の名におふ鳴戸の打潮に梶とりかねてほと／＼に、舟しかへれば、たけるらはおちかしこまり、せむすべのたどきをしらに、そこにしも思ひはからく、わか草のみめの命の色深きみけしの袖を、海若の神がほりすと、御袖裏解きさけ持て海中に投入であるを、中々に打潮高いやましに立しよせ來、頓に船は覆りぬ。しかれこそ松浦たけるは海底奥を深めていくくりなすづき失ぬれ、天皇の御靈た

すけて、わだつみのみことのまにま、はひろわにおひてか行し、あやしくもみめの命は現とも夢ともしらに、浪のへをなづさひわたり、淡路の野島が崎に時の間に、い行至りて恙なく、いませしとぞ云ふ、解きさけしみけしの袖は波のむた、流さえ來にて皇子のます行宮近き濱にしも打よせにけれ、濱にしも打よせにけれ、濱もせにその日のきはみ百に千に、なりいでにしをよろしなへ、名に負ひこしと袖貝のその故縁を、古よ今のをつくに語りつぎ云ひぞつぎたる、世中に奇しきことは物ごとにさには有ども、聞く毎にあやにかなしみ、見るごとに心動きて白妙の吾袖さへぞこゝた濡れつる

百に千に貝はよれどもこれやこの名に負ふ袖貝見ればあやしも（傍書は『続日本歌学全書』による）

#### 〈付記〉

なお、本稿の作製にあたって御厚恩賜わった谷山茂博士に、心より感謝申し上げる次第である。又、図書閲覧に際しお世話になった学習院大学図書館にも謝意を表する次第である。本稿は、大阪樟蔭女子大学昭和五十四年個人特別研究費による。

（本学助教授）